Sinite Parvulos Venire Ad me
子供たちを私のもとへ来させなさい

Viator

VOL.008

Happy Easter

復活されたキリスト

イブ・ボアベール

イエスは復活された，アレルヤ。わたしたちはこのことを心から信じており，また公にのべ伝えています。毎年，わたしたちは復活祭の日にこの喜ばしい出来事を荘厳に祝います。イエスの復活はわたしたちの人生に存在理由を与えるもので，これは信仰の中心です。

復活されたキリストを信じることは，信仰の問題にとどまらず，生命の問題です。毎年わたしたちはこの大切な祝祭を記念しますが，この祭りは，わたしたちの生命や希望を通じて，さらには復活したキリストがわたしたちに約束された生命を通じて，信仰を分かちあうようすすめているのです。教会に対する，また現代世界に対するわたしたちの使命は重要なものです。もちろん，復活とは，わたしたちの人生の根本的な基盤です。わたしたちは永遠に生きるものとなるのです。復活とはわたしたちのためにだけあるのではなく，世界に広がる兄弟姉妹のためにもあるものです。だからこそ，復活という出来事は重要なのです。

わたしたちはみな復活する

キリストの復活は，世界史の始めから現在までを意義あるものとします。イエスは，アダムとエバの罪にとらわれていたこの世界を，死から切り離したのです。人間とは「野の花のようなものだ」と，イザヤは語りましたが，これからというもの，人間はキリストの復活の内に希望のもといを見いだすのです。イエスが生きたまま墓から出てきたのは，イエス御自身のためではありません。それは私たちのためなのです。イエスの復活とは，私たちの復活の保証なのです（1 コリ 15，20-28）。これは，聖パウロがその書簡で述べていることでもあります。実際のところ，人類には，神と共にある生命が，人類すべてと共にある生命が約束されているのです。この生命によって，人間はもはや人格を失うことがなくなり，キリストのように栄光に包まれるものとなるのです（ローマ 6, 4；コロサイ 3, 4）。パウロはこのことをローマの教会への手紙で述べています。パウロは仲間から認められ，そして永遠に仲間と共にいるのです。わたしたちは，このような状態を想像しがたいのですが，これは，復活したキリストへの信仰から生まれるものです。

カトリック聖ヴィアトール北白川教会広報部会　2014 年 4 月 20 日発行
ホームページ：http://www.stviator-kcc.org/

復活は希望をもたらす

すべての人間にとって，キリストの復活は神と共に生きることを，神との一致を約束するものです。この約束は歴史の終わりに実現するもので，そのときには，死という「人間にとっての最後の敵」が打ち破られます（１コリ 15，26）。歴史の続くかぎり，復活は人間に希望を抱かせるものです。私たちは永遠の生命を待ち望むだけではなく，困難な人生の中にあっても，絶えず希望を抱き続けており，何によっても希望は失われることがありません。復活したキリストと共にいるのであれば，私たちを破壊するものは何もありません。また，いかなる試練に遭うこともなく，私たちは貧しさのために罪を犯すこともありません。親しい人の死でさえも「私たちをキリストの愛から」，つまりキリストの生命そのものから「切り離すことはできない」のです（ローマ8, 38－39）。パウロがこのように語ったのは，パウロみずからも，すっかり信頼を置いた人に対して生命を与えたからなのです。つまり復活したキリストは，世界の始めからその終わりにいたるまで存在理由を与え続けるのです。というのも，歴史はその存在理由を与えるものへと向かうからです。とはいえ，復活された主が通常の時間の流れを変えることはありません。復活されたキリストのまなざしを通じて，天地創造からの歴史の存在理由を読み取り，その意義を理解しなければなりません。

他者と世界への関わりを新たにする

キリストは神のひとり子であり，また人間の友ですので，わたしたちは復活したキリストを信じる以上，みな兄弟として生きなければなりません。というのも，私たちは，同じ父なる神の愛を受け入れているからです。私たちは人類全体に対する信者としての召命を，他者とともに深めるよう招かれているのです。私たちは，これから愛とお互いの尊重によって，他者との関わりを生きるものとなるのです。これについて聖パウロは「キリストはその人のためにも死なれたのです」（ローマ 14，15）と語っています。

復活されたキリストは私たちの召命を明らかにします。キリストは希望のメッセージを伝え，苦しみや罪，死に打ち勝ったのです。被造物は，時としてどれほど圧倒的な力を持って人間に迫ってくるものであったにせよ，人間の歴史の中で，人間と神との関係をさまたげるものではありません。むしろ被造物は，人間と神の関わりが現れる格好の場なのです。人間はこれを無視することができませんし，無制限に被造物を使いつくすこともできません。人間は，その生命や死後の生命について被造物に依存しているだけではなく，被造物がなぜ存在するのか，その理由を伝える責務を持っているのです。復活したキリストによってこそ，人間はその存在理由がわかるのです。

神に関するもう一つの見方

知恵の書を見ると，神は愛のゆえに，あらゆるものを創造したとあります。神が被造物を愛さなければ，創造することもなかったでしょう。神は，私たちが神の生命を生きることを望まれたのです。復活とは，神が私たちが愛しておられることのまごうかたなき証拠です。神は私たちの試練に対して，さらには誰もに訪れる死に対して無関心でいることができるでしょうか。神は，被造物や万物を破壊することを望まれる

でしょうか。人間や被造物を愛しているのですから，このようなことは想像できません。神は，私たち皆に，例外なく訪れ，人間の歴史に介入し，そこに姿をあらわします。神は，聖霊の力によって御子を死から切り離し，人間を神との交わりに招きます。というのも，神は生きているものの神だからです。神は，私たちが想像しうる以上のあり方で人間を愛し，神が人間を愛しているように，人間もまた神を愛することができると啓示します。神は生命の神であり，私たちが神に由来するのであれば，イエスの復活は私たちにとって根本的な証拠です。これを信ずるのであれば，私たちも東方三博士にならって別の道を通って進むことになります。そして，これは生命へいたるものです。

みなさん，御復活おめでとうございます。

2013年クリスマスに洗礼の恵みにあずかった皆さんからのメッセージ

ヨゼフ・K.Y

受洗まで二十年近く、躊躇と疑問の時間がかかりました。その後、特別大きな事件や変化があったわけではなく、ただ、突然、ごくあたりまえの、実に単純な事実に「ああ、そうか」と気がついて、今の自分があります。私が罪を認めて悔い改めるから、神が私を愛することをお望みになるというのではなく、逆に、神がまず私を愛してくださるから、御子が来てくださったから、聖霊の愛の中で、はじめて私は御前に膝を折ることができる、ということでした。それまで長い間、信仰を持つためには、まず最初に「悔い改め」て罪を認めなければならないと思っていました。そうである限り、信仰など不可能だと。「ま・さ・か」と神父様は言うでしょう。実際にはすべてが逆でした。自分を愛していない他者に、自分の心の奥底をゆだねることなど、できるわけがありません。自分を心から愛してくださるその方が、いつも自分と（あなたと！）ともにいてくださる。すべてはそこから始まるのでした。それ以外のすべてはその結果です。実に簡単で思わず笑ってしまうほどです。主が、いつまでも、そばにいてくださいますように。

喜びの日 モニカ・N.T.

この度，ボアベール神父様のご指導のもと，クリスマスの良き日に受洗のお恵みをいただきました。多くの方々に見守られ，大変うれしい一日でした。今まで歳を重ねてまいりましたが，このような日を迎えることができるとは，思いも致しませんでした。すべてはお導きと思っております。

日頃は家事のかたわら，好きな毛糸刺繍や編み物を少ししております。これからは，教会で教えていただきましたお言葉を想いながら，庭の木々や花と共に，成長してゆけたらと思っております。

何もかもわかりませんが，どうぞ皆様，これからもご指導のほど，よろしくお願い申し上げます。

ベルナデッタ・M.U.

洗礼のお恵みありがとうございます。幼児洗礼についてキリスト教の中にも賛否があるようなことをお聞きします。私自身も幼児洗礼を受け初聖体、多感な時期教会を遠のくことがありました。

あるとき神父様にそのことをお話したとき、「キリストはあなたを離さなかったんですよ～。」とお言葉をいただきました。成人で洗礼を受けられる方々は自身が神様に呼ばれた瞬間を知っておられます。しかし、私の両親たちがこのお恵みをいただく機会を与えてくれていなかったら、神様に呼び戻してもらうことができたでしょうか？不安に思います。また、キリストが七つの秘跡の最初のものとして与えてくださった娘マリアの洗礼につきまして、いろいろな方々から多くの祝福をいただきました。共同体としての喜びを痛感いたします。

ヴィアトール・H.M.　フランシスコ・M,M,

洗礼式では多くの方々にお祈りと祝福をいただき、家族一同幸せな気持ちでいっぱいです。皆様に家族一同、心より感謝申し上げます。

今回洗礼を頂いた三男 (小１) は自分で「ヴィアトール」と、四男（１歳）は現在の教皇様にちなみ「フランシスコ」と兄弟たちで相談して決めたようです。

子供たちは教会での御ミサや勉強会、学校の授業や行事で学んだ神様や聖書のことを、とても楽しそうに教えてくれます。これからの生活の中で､子供達が守護聖人の信仰生活を想い、神様を感じ、神様とともに歩んでくれるよう夫婦で見守りたいと思います。今後ともよろしくお願い申し上げます。

フランシスカ・I.K.　マリア・クララ・C.K.

娘は，小学校の宗教の時間に聖書などに親しむ中で，教会に関心を持ち，教会の日曜学校にくるようになりました。そのなかで娘は受洗の希望を持つようになり，しだいに御聖体を頂きたいと思うようになったのです。私も娘の影響を受けたのでしょうか，教会生活に少しづつ親しみ，洗礼の恵みにいたりました。

これまで，教会の皆様から親切にして頂きました。洗礼によって，神様のもとで皆様の兄弟姉妹となりましたので，これからはわずかであれ，是非とも皆様のお役に立ちたいと願っております。そして，この喜びを大切にしていきたいと思っています。

カトリック北白川教会 信者総会議事録

作成　役員会

2014年3月2日(日)11:00~12:30 集会室で信者総会を実施。ボアベール神父様、ベリーニ神父様、イグナシオ管区長様、ベルナルド修道士様、信者42名（役員5名を含む）が出席しました。

議事：

1．2013年活動報告

・典礼部、教育部、教会行事支援部、施設管理部、財務部、広報部の活動が報告されました。

2．2013年会計報告

・集計結果が報告され、イグナシオ管区長様より監査で誤りがなかったことが報告されました。

3．2014年活動方針と組織の説明

・“そうだ！ 喜びを持って御ミサに預かろう。Jesus speaks to us. We listen to him. 神の「貧しさ」を生きる一年としましょう。”を全体方針として、具体的活動を設定。

・各部活動方針を各部会代表が行い、出席者より確認されました。

・質疑：手伝っている人が誰か分かるように役割表に係り全員の名前を入れてもらいたい。

≪結論≫役割表に責任者だけでなく全員の名前記載を検討する。年間の変化も反映したい。

4．2014年予算の説明

・人員の変動等を考慮して昨年の実績から修正。コピー機が壊れたので更新予算を組み込んだ

・教会活動を維持するため教会費と結婚式、募金、コーヒーブレークなどの活動協力お願いする。

5．話し合い

・ブロック共同宣教司牧のため教区神父様が北白川教会に訪問していただく見通しはどうか？

≪ボアベール神父様≫ 今後も小教区に協力して実現していきたい。それだけでなく、インターネットを活用して価値ある情報を皆さん送っていきたい。ホームページも充実していく。

・消費税の影響があるのではないか。予算計画より赤字が増加する事はないか。

≪回答≫状況に応じ削減も考えないといけないと考えている。収入維持に協力をお願いる。

≪ベリーニ神父様≫教会はやるべきことは借金してでもやるべき。また、宣教司牧の場と色々な活動の場を分けて行い、両方をうまく活発にしていかなければならない。

・バザーは色々な作業があり協力してくれる人集めに苦労していて、横の繋がりでカバーしている。組織的な活動として行事、信仰など色々なことを話し合う場、信徒会を設定して欲しい。

≪結論≫信徒会を検討したい。まずはワーキンググループをつくり枠組みを相談したい。

・コンサート、バザーなど、皆が集まってざっくばらんに相談する機会が必要。良い季節のガーデンパーティなど楽しいイベントで堅苦しい場にならないことも考えて欲しい。

６．お知らせ

・転出転入の手続きを必ず行うこと。結婚について結婚法務担当からの規則の説明。

・掃除当番表、コーヒーブレーク当番表。

詳細は教会より配布されています信者総会資料①～⑧をご参照ください。

助祭叙階式を終えて

Br. セルジュ

私はまだ助祭叙階式の喜びの内におります。式の間はたいへんに感動的な時を経験できました。またパウロ大塚喜直司教さまにはご多用のところ，この祭儀の司式をご担当いただきましたことを心より感謝申し上げます。また，司祭，助祭の皆様，助祭叙階式においで頂きました北白川教会の信徒に皆様に深く御礼申し上げます。主がみなさまの思いを越えて，ゆたかに恵みを満たされますように。また，このすばらしく，荘厳な助祭叙階式ミサのために準備を頂きました皆様にも恵みがありますように。

助祭叙階とは，司祭叙階を前にして，7年間の養成の最終段階です。修道会の神学生として，司祭叙階が私の進路の到着点なのですが，とはいえ助祭叙階が些末な出来事ではありません。それは，助祭叙階の当日に，大勢の司祭や女性や家族，小教区のたくさんの友人がいらっしゃったことからも明らかです。

助祭叙階とは重要な日です。というのも，これは決定的な契約の時だからです。叙階の典礼文に従って司教が候補者に投げかける質問を見ると，そのことがよくわかります。

司教：独身生活を受け入れる決心をしたあなたは、神と人々に仕えて天の国をめざすために、主キリストに自分をささげるしるしとして、この決心をいつまでも守りますか。
助祭候補者：はい、神の助けによって守ります。
司教：あなたは、自分の生き方にふさわしい祈りの心を大切に育み、この心に従い、自分が置かれた場で、神の民とともに、教会と全世界のために、「教会の祈り」を忠実に唱えますか。
助祭候補者：はい、唱えます。
司教：あなたは、教会共同体の助けのもとに、貧しい人、苦しむ人、助けを必要とするすべての人に、主の名において、神のいつくしみを示しますか。
助祭候補者：はい、示します。
司教：あなたは、教区司教とあなたの上長とのきずなの中で、尊敬の心をもって彼らに従うことを約束しますか。
助祭候補者：はい、約束いたします。
司教：祭壇でキリストの御からだと御血に奉仕するあなたは、たえずキリストの模範に従って生活することを望みますか。
助祭候補者：はい、神の助けによって望みます。
司教：あなたのうちに、よいわざを始めてくださった神ご自身が、それを完成してくださいますように。

このように，助祭の叙階にあたって，神の国のために独身を生きること，毎日，教会や世

界のために教会の祈りを唱えること，また司教を尊重し，司教への従順を誓うことによって司教との一致を生きることを約束したのです。そしてこれは生涯を深くつらぬく出来事なのです。

北白川教会の主任司祭，信徒の皆様，助祭叙階という荘厳なる日に皆様の教会に受け入れて下さいましたこと，深く感謝申し上げます。

Br. セルジュの助祭叙階式によせて

N.N.

Br. セルジュの助祭叙階式を北白川教会で行ったことは，わたしたち北白川教会の信徒にとって大きな喜びです。

Br. セルジュは，西アフリカの内陸国ブルキナ・ファソ出身の宣教師です。ブルキナ・ファソはかつてオートボルタと呼ばれ，1960 年にフランスから独立するまで 70 年間あまり，植民地支配を経験し，それ以前には奴隷貿易の苦しみにもさいなまされた国です。西欧諸国は 300 年以上にわたり，アフリカ諸国を奴隷貿易に組みいれ，多くのアフリカ人をカリブ海や南米の国々へ連行しました。

このような過去とカトリック教会は無関係ではありません。カトリック教会もアフリカでの植民地支配や奴隷貿易に深く関わり，人権の抑圧に加わった責任を共有しています。

しかし，このような歴史を経験したキリスト教はアフリカで次第に土着化し，キリスト教はヨーロッパの宣教師が持ち込んだ西欧の宗教ではなく，アフリカの宗教の一つへと変容していったのです。

このような歴史を踏まえて，Br. セルジュは宣教師として来日し，日本の教会のために，日本人のために福音を伝えるようにとの招きをうけたのです。その姿は，アフリカの大地にキリスト教が土着化したことのまぎれもないあかしであり，イエスの福音が全世界に述べ伝えられていることを雄弁に物語るものです。

北白川教会は，そして日本の教会はこのような南の国からの宣教師を受け入れ，共に御言葉を生きることによって，キリスト教が西洋だけの宗教ではないことを，福音が全世界に広がっていることを生きる恵みにあずかっているのだと思います。

東北へ行って

E.O.

仙台で森田神父さまと私は教会の東北支援の活動に参加しています。参加といっても金銭的にはあまり貢献しいていません。あくまでも個人的に無理をしない範囲での活動に無理をしない範囲で参加をしています。決して胸を張って「東北支援に貢献している」といえるものではありません。ですが、東北に繋がっていることは確かなのだから、東北の今を知らなくてはいけない、と思っていました。震災と津波と原発事故、その他多数の打撃を受けた東北の現

仙台で森田神父様と

状を知らなければ、私たちがやっていることは自己満足に終始してしまうからです。他人からもらい泣きしているような、モヤモヤした感覚のまま放置したくなかったので、中学卒業式の後東北に行くことにしました。

仙台空港は、津波の時には波にのまれたと聞きましたが、私が首を伸ばして見回してもその痕跡はありませんでしたので、少し安心していました。仙台城跡、松島といった観光地として有名な場所を廻っても、あちこちで工事が行われているだけで、テレビで報道されるような津波の爪痕は見当たらず。観光客で賑わう様に私は違和感をもちました。こんな所を支援しているのか、とさえ思いました。もう十分人が溢れて賑わってすっかり元通りじゃないか、もう支援はいらないのかな、と思ったのです。しかし、よく見ると、そうではありませんでした。松島の奥に「奥松島」というところがあります。松島と同じような美しい島々がある海沿いの場所ですが、そこを廻ってみてどきりとしました。一面真っ平らな、土色の眺めの向こうに、確かに奥松島の美しい島がありました。土色の眺めの中には所々に枠だけのビルや家、壊れた車。私が知る「被災地・東北」の光景に私は初めて出くわしました。そういえば、仙台城でもトビの像が台座から落ちたままでした……。風情のある松並木はぷっつり途切れて、根っこやら枝やらが散乱する荒れ地に替わっていました。復興は進んでいるようには思えません。クレーンやブルドーザーも動いていませんでした。

南三陸町の景色

南三陸町は、すべてがそうでした。何もなかった。人もいなかった。此所で何人が死んだ、死んだ、と「語り部バス」の語り部ガイドさんがいう声が耳の中を通り抜けていきました。悲しさもなくて、ただむなしさが広がっているような所でした。

テレビ新聞、ネットで世界中で伝えられていることを私は誤解していたのかも知れません。震災から時が経って、福島の原発の状態や、復興の兆しなどをとりあげた特集に眼がいきがちです。支援に関わる人間という意識がどこかにあって、東北はやっぱり大変だから、支援して。ほら、成果も出ているじゃないか。そういうふうに自己満足していました。東北へ行ってそれがなんとなく後ろめたかったのを覚えています。誰も見てくれなくても同情してくれなくても黙々と生き、外部の人を喜んで迎え入れてもてなす。東北では皆そうでした。当然のように「恩を売りつけていた」自分が恥ずかしくなりました。

今回私は東北へ行って良かったと思います。学んだこと、つかんだこと，感じたこと、まだはっきりと整理できませんが、東北で人の笑顔に逢えたことが嬉しかった。悲愴な顔をした観光客や痛々しい災害の跡より、あちらで生きている人々の方がずっと心に響きました。そうして東北を好きになって帰って来られたことが一番の収穫です。

東北で被害を受けた人々の気持は私にはまだわかりません。知ろうとすることは大切ですが、わかった気になって東北を見るのは傲慢だと思います。私は東北が好きですから、出来ることをやる、それだけで良いと思っています。

2014 年 3 月 29 日記